

潮かぜ

うしおかぜ



新潟市立寄居中学校学校だより

令和2年4月22日（水）発行

「不易流行」



教頭 今井 岳

この4月、私は7年ぶりに寄居の門をくぐり赴任してきました。校門から校舎まで続く桜は、昔と変わらず、私を優しく迎え入れてくれるようでした。4月初旬は気温が低かったこともあり、例年よりも長い期間「寄居の桜」が疲れた私を癒してくれました。

ある朝、校内をまわっているとき、中庭の池に10cmほどの朱い金魚を見つけました。5cmにも満たない小さな金魚だったという当時の記憶がよみがえり、噴水しかないこの池で無事にこんなに大きく成長していたのだと驚きました。また、グラウンドのポプラが台風で折れたことはショックでしたが、以前はなかった「躍進寄居は心と礼節～夢・挑戦・感動～」の垂れ幕は、私や生徒の皆さんを応援してくれているように感じました。寄居での生活はまだ1ヶ月です。これから発見するであろう、寄居の進化した姿が今から楽しみです。

今、新型コロナウイルスの問題が世界中を悩ませています。新潟も例外ではなく、今まで当たり前になっていたことができなくなり、まったく異なる発想から取り組むことも求められます。寄居中学校では、入学式の校歌をCDで流したり、新入生歓迎会を放送で行ったりするなどの対応をしました。また、全員が黒板を向いてランチを食べたり、部活動が休止されたり、下校時間も時差をつけて混雑しないように帰ってもらっています。

これからいよいよ学校生活が本格的になっていきますが、その中でも今までどおりにはいかないことが出てくると予測できます。それは、自分の命を守り、周囲の人の命を守るために必要なことなのです。そして、その積み重ねが、日本や世界を救うことに繋がります。

再び休校になるなど、皆さんにたくさんのストレスを与えてしまっている学校生活ですが、皆さんは「こんにちは」とさわやかに挨拶をしてくれ、昼休みには男女分け隔てなく休憩時間を楽しむ姿が見られます。自分とともに相手を大切にする、思いやりのある言動が様々なところに感じられます。リーダーが積極的に周囲の仲間へ手を貸してやる、そんな支援的リーダーシップが寄居にはあります。

僧侶だった私の祖父から聞いたのですが、真言宗で最も大切な修行のひとつが「掃除」なのだそうです。朝起きて、まず掃除をしっかりと行い、隅々まできれいにすることから毎日が始まるのだそうです。寄居中学校の掃除の時間には、男女関係なく膝をついて力を込めて雑巾がけをしてくれる生徒がたくさんいます。それは、掃除をしながら、校舎と一緒に自分自身も磨いているのだと思います。

校門から生徒玄関までの歩道脇に「生きがいと思いやり」と刻まれた古い石碑があります。皆さんの先輩も大切にしてきた言葉です。君たちもそのバトンを今、しっかりと受け止めてくれていることと思います。残念なことに新型コロナウイルスにより、学校生活も社会情勢も先が見えません。でも、どんな状況に合ったとしても大切に守っていききたい、それが「寄居の心」です。



いずれも急ぎよ、放送によるものでしたが、発表の態度、聞く態度ともに、真剣で、心のこもったものでした。